



Title	分詞構文が懸垂分詞構文になるとき : コメント機能成立の条件
Author(s)	早瀬, 尚子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2016, 2015, p. 21-30
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/57365">https://doi.org/10.18910/57365</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 分詞構文が懸垂分詞構文になるとき：コメント機能成立の条件\*

早瀬 尚子

### 1. はじめに

懸垂分詞節は、(1)に見るようにそれ自体が談話上のコメント機能を発揮する。

(1) *Speaking as a young person*, when I meet people, the first thing I think of is not their color, it's how do they greet me. I don't see people's color when I first meet them. (COCA).

(2) *Speaking as a young person*, he tried to attract the college students.

懸垂分詞節が容認されるのは、概念化者が典型的には話者に一致し、分詞節での行為を行った結果主節内容が知覚される、というシナリオ的意味を表す場合である（早瀬（2009, Hayase 2011））。主語一致の（規範的な）分詞構文と懸垂分詞構文との違いは、前者では概念化者が観客として客体的に事態の推移を眺める視座をとる一方、後者では概念化者が自ら主体的に事態に関わる視座からの描写だという点である（早瀬 2009）。

ただし、懸垂分詞節のコメント機能がどのような言語要素によって具体化されるかについては、検討の余地が残されている。現在分詞や過去分詞単独で懸垂分詞節が成立することはまれであり（ただし、後述するようにそのような事例もある）、多くは共起要素を伴っている。しかし(1)と(2)では同じ分詞節が用いられているものの、(2)は通常の主語一致の分詞構文としてしか成立できない。何が2つを分かつのだろうか。本論では、どのような共起要素だと懸垂分詞構文として「適格に」なるのか、懸垂分詞構文が主語一致の分詞構文とどのように棲み分けを行っているのかについて、探してみたい。

### 2. 検討

#### 2.1. Speaking を用いた主語一致分詞構文の特徴

Speaking を用いた分詞節は、懸垂分詞の中でも最も談話機能、特にコメント機能が発達しているといつてよい。Speaking と共起する表現にも多様性が認められる。しかしその使用および多様性は、ある基準が満たされる限りにおいて許されるものである。

まず speaking が通常に分詞構文、つまり主語一致のケースとして用いられる事例には、その主節に発話を導く形式が高い頻度で生起するという顕著な傾向が見られる。

(3) a. *Speaking at a Republican dinner*, the president again made the case for not backing down.

b. *Speaking before central bank managers*, Mieno said the BOJ will continue its cautious monetary policy.

\* 本論考は、第33回日本英語学会のシンポジウム『構文変化と談話・情報構造—データと理論の融合を目指して（2015.11.22）』での発表の一部である。尚この論考には科学研究費（基盤（C）No. 26370564）の助成を受けている。

- c. **Speaking to Chinese-American business people in NY**, Mr. Wen said, (...)
- d. **Speaking as a critic and connoisseur of academy art**, Kenneth Clark described the eighteenth century as “that winter of the imagination.”
- e. **Speaking about a House budget bill**, Bittman said: “....”

いずれの主節にも S said もしくはそれに準じる表現が用いられており、後続するのがその発話内容となっている。このとき、分詞節はその発話の場面の詳細を決定する意味機能を果たしている。(3a)では発話した場所を、(3b)(3c)では発話の対象としての聴衆を、(3d)では発話した自らの立場を、そして(3e)では発話の話題を、それぞれ表す。つまり、speaking を用いる分詞構文では、「話しながら～した」というような同時に起こる異なる行為を表すのではなく、「話した時に～という内容のことを{発言した・言った}」という、単一の(発話の)行為事態の詳細な状況描写を行う関係を表現するのが典型的なのである。

このような状況描写上の偏りが、懸垂分詞の場合にも引き継がれている。次節以降ではその制約について見てみたい。

## 2.2. X Speaking

懸垂分詞由来の定型形式 X speaking では、典型的には X の要素として副詞をとる。

- (4) *generally(929), strictly(385), broadly(162), relatively(175), technically(110), roughly(96), politically(81), properly(78), historically(61), statistically(60), figuratively(50), comparatively(46), legally(43), frankly(37), metaphorically(34), (...)*

いずれも speaking の様態 (MANNER) を表す要素である。「一般的に言う (generally speaking)」、「厳密に言う (strictly speaking)」など、どのように語るかをより詳細にする要素とも言える。

ただし MANNER と指定するだけでは懸垂分詞節としては不十分で、実際に共起できる要素は意味の観点からさらに限定される。

- (5) *Speaking {#kindly/#softly/#fast}...*

(5)は「言い方」を詳述する純粋な MANNER でだが、それではコメントとしては機能せず、懸垂分詞としても不適格である。(4)と(5)の違いは、前者が話し方ではなく話す内容に直接関係するものである点である。つまり、コメント機能をもつ speaking と共起できる要素は、MANNER 表現の中でも後続発話を限定するものに限られる、とわかる。

また純粋な副詞以外に as 句が共起する例も見つかるが、これらも発話内容に関わってくる限りは懸垂分詞節として容認される。

- (6) a. **Speaking as a veteran myself**, the behavior of those four Marines may have been influenced by the war, but my guess is that .... (COCA)
- b. **Speaking as a father**, what is your own personal reaction to this? (COCA)
- c. **Speaking strictly as a fan**, exactly what's wrong with Oracle? It's a fabulous

place to watch a game. (COCA)

(7)の *speaking as*～では、*as* 以下の内容によりどのような立場から語るかが変わることによって発言内容そのものに影響が出る。以下の例ではそのことが端的に表れている。

- (7) ***Speaking as an executive***, your daughter might feel alienated enough to look for opportunities elsewhere. (...) ***Speaking as your friend***, I'm gonna be blunt. You might just lose your daughter. (SOAP)

立場や役割が *executive* か *friend* かで言う内容が異なる。このように、内容に影響があり深く関わる側面に言及し、それを限定する表現ならば懸垂分詞の *speaking* と共起できる。

同じような制約は他の副詞句にも見られる。

- (8) a. ***Speaking {while staying at Tokyo / with an accent}***, the president said that the present economic recession should be tackled soon.  
b. ***##Speaking {while staying at Tokyo / with an accent}***, the present economic recession should be tackled soon.

(8)のように、発話主体の MANNER (*while*～) や発話の際の MANNER (*with an accent*) に関わるものは、主語一致の分詞構文としては可能だが、懸垂分詞として機能することはいかない。懸垂分詞の *speaking* と共起できるのは、MANNER の中でも発話内容に影響するとみなされる要素なのである。

### 2.3. *Speaking {of X / about X}*

前節では MANNER の中でも後続する主節が表す発話内容を何らかの形で限定する情報を提供することが、適格な懸垂分詞節の使用条件であることが明らかになった。では MANNER 以外では無理だろうか。可能だとすればどのような偏りが見られるだろうか。

*Speaking* と共起しやすい前置詞には、*of/about* が挙げられる。特に *of* は *speaking* の懸垂分詞用例の中で最も共起頻度が高い。これらの前置詞は、後続する発話の内容やターゲットを明示化したり後続する発話の場面設定を行ったりするタイプなので、「発話内容を限定する」という先ほどの副詞にかかる制限と合致する。

- (9) a. ***Speaking of the future of books***, there's news today that Google plans to start selling books. (COCA)  
b. ***Speaking of the economic recession***, how do you expect next year's the stock market? (COCA)  
(10) a. By the way, excuse me. ***Speaking about the Patriots***, isn't it curious, Cal, that we don't have this kind of scandal in the—brewing in the press, about football. (COCA)  
b. ***Speaking about the Pentagon***, let's go for the view across the Potomac at the Pentagon. (COCA)

他にも *speaking* が *to* と共起する例がある。例文数自体はさほど多くないものの、どの

事例も、「to が導く要素が、後続する言説 (statement) 内容を得る情報源」と考えられる。to 以下の要素が変われば、発言内容も変わりうるため、to 以下の要素は前節で見た副詞の時と同じく、発話の内容の限定・決定に関わるものに限る、とまとめられる。

- (11) a. *Speaking to people in the street*, it's clear that much of the anger was focused on now former President Zine El Abidine Ben Ali. (COCA)  
b. *Speaking to our parents*, they are struggling to be able to keep the same levels of food on the table. (BBC News 2013)

ただし、「発話内容を限定する」かどうかは前置詞だけでは判断できない。後続する発話内容に関わるかどうか問題なので、同じ前置詞句でも異なるふるまいを見せる場合がある。(12)はその例である。

- (12) a. *Speaking with some of our Elders in our community of West Point and also some of the Elders within our region of Dehcho*, the comments that are made from the Elders are saying: (...)  
b. *#Speaking with humor and conviction*, ...

(12a)では、相手と話す中で出てきたコメントや話題をその主節で述べている。「話す相手」は情報源であり、発言内容を決定する役割を果たす。つまり with 句は後続の発話内容に直接関わり、それを限定する働きをもっている。同じ with 句でも(12b)の with humor and conviction は、発話のプロセスに関わる MANNER を示しはするが、発話内容はそれには左右されない。つまり発話内容を限定してはいないため、不適切となっているのである。

同様に、同じ in 句でも振る舞いの差が見られる事例が(13)である。

- (13) a. *Speaking in military terms*, it looks better than previous days.  
b. *#Speaking in Russian, / in a flat, steely voice, / in Korea*, ...

(13a)のように「軍事的な観点から語る」ことは発話内容を直接左右する。しかし(13b)では語り方や伝達の仕方を表すが発話内容とは無関係なため、懸垂分詞としては使えない。

一方で、through や over, from は、そもそも発話内容と無関係な、発話のプロセスそのものに関わる MANNER 情報を表す。このため懸垂分詞としての使い方は一般に難しい。

- (14) a. *#Speaking through {the megaphone/a spokesman}*, ...  
b. *#Speaking over the phone/the TV networks/the noisy hum*, ...  
c. *#Speaking from the {platform/the auditorium}*, ...

以上まとめると、懸垂分詞 speaking と共起できる要素は、ADV などの統語カテゴリーだけでは決定できない。同じ前置詞句 (e.g. in/through 句) でも主節との意味的な関わり方で可否が決定される。適格な懸垂分詞となるか否かの判断には「後続する主節内容形式を限定する」か否かの知識を援用する必要がある。たとえば、次の事例はいずれも speaking in the court だが、容認性が異なってくるのは内容に関わるか否かが異なるからである。

- (15) a. *Speaking in the court*, the investigator said that to date no one else had been found who was involved in the crime.

b. *Speaking in the court*, he may be sentenced to lifetime imprisonment.

Speaking personally, however, he deserves a stay of execution.

*Speaking in the court* が単に発言の場を示すものであれば(15a)のように主語一致の分詞構文としてしか使用できないが、「(個人的にではなく) 法律家として語るならば」という意味であれば発言内容に関わるため、(15b)のように懸垂分詞として成立する。

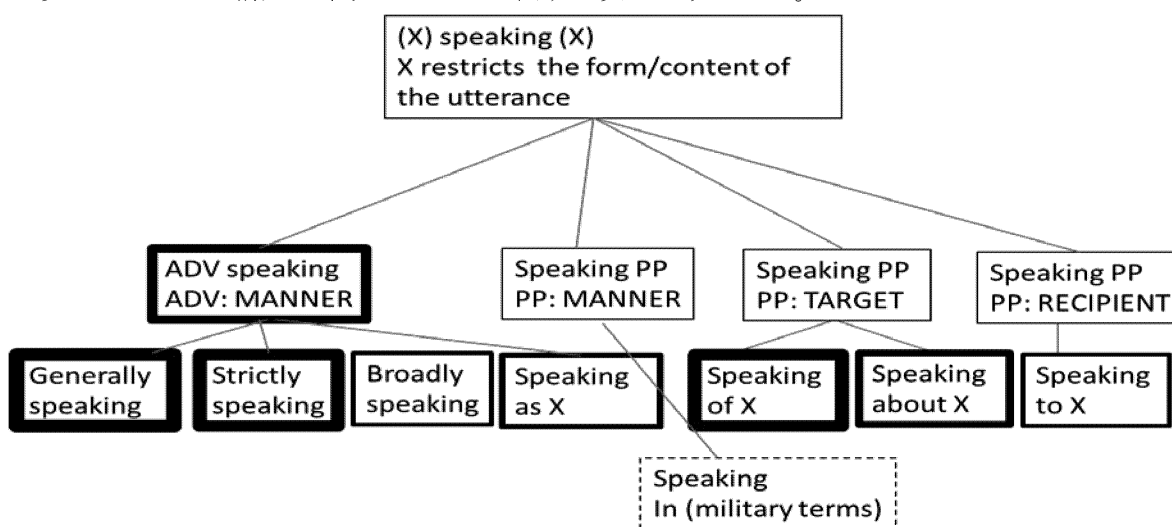
以上、主節の発言内容を限定するものであれば懸垂分詞 *speaking* が生起できることが確認できた。尚、この特徴は懸垂分詞の特徴がそもそも主節内容を何らかの形で限定するものであるという一般特性を引き継ぐものと考えられる。たとえば(16)の例で、*looking down* という懸垂分詞は主節内容の認識に関する必然的な前提として機能している。

(16) *Looking down*, (the conceptualizer found that) blood spattered even his sandals and bare toes.

「見下ろす」という行為をして初めて概念化者は主節の光景を見ることができる。この点では懸垂分詞 *looking down* が主節の内容の知覚認識の成立する状況を設定する限定条件だと考えられる。一般の分詞構文が単に同時に並列する事態であることと比べると、懸垂分詞構文では分詞節と主節の間に意味上の緊密さが見られる。この意味上の緊密さがより具体的な形で現れたのが、懸垂分詞としての *speaking* における「発話内容との関わり」という側面だと考えられる。この点、上位構文からの意味の継承 (Goldberg (1995/2006)) が見られる。

## 2.4. 懸垂分詞 *speaking* の分布図

以上のまとめを構文のネットワークで表すと次のようになる。



頻度の高い表現は定着度が高い。Generally speaking や strictly speaking などはその例である。同様の表現は他にも broadly speaking などもありタイプ頻度も高いため、その上位のスキーマである [ADV speaking] の定着度も高くなる。ただし、ADV という形式から単純には予測できない側面も持っており、副詞要素が主節で展開される発話内容や形式を決

定するような MANNER タイプのものに限られる。この意味的な制約はすべての表現形式に共通して継承される。**speaking of/about** はすべての事例について「発話内容に関連する表現」と認められ、例外がないので定着度も高い。一方 **speaking to** では相手との対話から分かることが発話内容で展開される限りは認定されるが、そうでなく懸垂分詞として認めがたい事例もあるため、この表現の定着度は低くなる。

以上をまとめると、**speaking** を用いた懸垂分詞構文は、後続する主節が表す発言内容を修飾し限定するものでなければならない。この制約は、もともと懸垂分詞が一般的にもっている特徴である「後続の主節を何らかの形で限定・条件付けを行う」という意味の継承を行っていると考えられる。

### 3. 懸垂分詞一般への制約と拡張

前節では **speaking** を用いた懸垂分詞の使用条件を「後続する発言内容の限定」と導きだし、またさまざまな共起要素との組み合わせが構文ネットワークを成すことを見た。同じことが他の懸垂分詞でも見られることを以下確認する。

#### 3.1. その他の発話動詞由来の事例：talking

**speaking** と同じ発話動詞由来の **talking** も、**speaking** と似た使用例を見せる。(17)に見るように、発話内容の話題に関わる **of** や **about** はもちろん、発話内容を聞き出す情報源としての話し相手をマークする **with/to** が生起可能である点も類似している。

- (17) a. ***Talking of unattractive expressions**, what's up with you?*
- b. ***Talking about spirituality**, this is why I exist.*
- c. ***Talking with her now**, it is difficult to believe...*
- d. ***Talking to the folks who grow pumpkins**, it's clear that although pumpkin may be a fruit, it doesn't have to star in sweet dishes.*

発話内容を限定する MANNER 要素は、(18)の **in terms of** のように発話内容に関わるものであればコメント機能をもつ懸垂分詞として認定されるが、(19)のように話し方の MANNER 情報でも内容に関わらない要素は共起できない。

- (18) ***Talking in terms of asset values rather than number of savings and loan institutions**, it "seems reasonable" to expect the RTC to resolve thrifts with assets of \$20 billion to \$40 billion per quarter.*
- (19) a. ***#Talking silently**, (he confessed his sins.)*
- b. ***#Talking in street slang**, (they discuss how AIDS is spread.)*
- c. ***#Talking on the phone**, (he'd glance at her.)*
- d. ***#Talking with her**, (you would never guess she's famous.)*

このように、**talking** の懸垂分詞使用には **speaking** と同じ制約が認められる。ただし **speaking** より生起例は少なめであり、定着度もその分低くなるため、コメント機能表現と

しては *speaking* ほど広く認識されていないと思われる。

### 3.2. 思考動詞由来の事例 : *thinking*

発話動詞以外でも同じ傾向が見られる。思考動詞由来の *thinking* では主節での思考内容を限定するものが共起要素であれば容認される。

- (20) a. *Thinking about my own mom*, she did what the job description said.
- b. *Thinking of an army entering the city*, a foreign army, they cannot communicate with the people, they cannot speak Arabic.

*about/of* で思考内容である TARGET を限定するパターンも *speaking* で発話内容の TARGET を限定するケースと類似している。(21)のように TARGET と MANNER が共存するケースもあるが、いずれも内容を限定する要素なら可能となる。

- (21) a. *Thinking more strategically now*, ...
- b. *Thinking back*, ...
- c. *Thinking creatively about* how to set up resilient regimes to govern the conflict over water, territory and security can also go a long way in raising the peace appeal.
- d. #*Thinking {slowly/quickly/kindly}*, ...

(21a)では考え方を *strategic* に限定し、(21b)では思考対象を過去(*back*)に限定することとなる。(21c)は混合例で、MANNER と TARGET を両方用いているが、いずれも主節で得られる思考結果が決定されることになる。しかし(21d)のように、思考内容に無関係な、プロセス志向や主体志向の要素は共起できない。つまり、*speaking* と同じように、主節での内容（この場合は思考の内容）を限定するものに限られるのである。

### 3.3. 移動動詞由来の事例 : *moving, going, turning*

*Moving* を用いた懸垂分詞構文の事例は、これまでとは異なり、MANNER に関する表現とは共起しない。

- (22) a. *Moving on to the next topic*, ...
- b. *Moving to politics*, an election can be seen as a Race (...), a competitive Team Sport (...), a War or Combat (...), and possibly Predation as well. (Sweetser and Dancygier *Figurative Language* (2014: 68)).
- c. Okay. *Moving down*, this is one of my favorites, perfect for weekend entertaining. This is a traditional low country shrimp boil.
- d. [T]he priorities have always been the safety of life, and rescuing those people that could be rescued. *Moving past that*, we're trying to make sure that the evacuees and the people in the immediate area have food, water, ice, and make sure they have fuel for their vehicles, and the evacuees have



shelter. ***Moving beyond that***, a number of things have to happen.

移動動詞由来の懸垂分詞は、MANNER との共起が不可能で、スキーマ的な移動経路(PATH)かその移動結果の到達地点(GOAL)を表す要素に限定される。<sup>1</sup> その理由は、発話の流れに沿って話題の提示順序を示す目的に合致する要素だからと考えられる。

個々の前置詞に関して言えば、on は TOPIC の移動そのものを表し、頻度も最も高いため、moving on という組み合わせが一番定着している。また(22b)の to は TOPIC への移動方向を特定化するので次に定着を見せる。さらに(22c/d)の down/past/beyond などのように、TOPIC への移動経路情報(PATH)を提供する・貢献するものであれば懸垂分詞として認可される。

より基本的な移動を表す going も PATH 情報をとるが、その中でも制約があり、going {back/on/forward/beyond}などの、前後を基本とする一方向的な移動経路のみを表す。

- (23) a. ***Going back to the debates themselves***, (...) there was a...
- b. “(...) ***Going back through your career***; your book, it has always been a rough, (...) "And I pointed that out, Alan. ***Going forward***, if Republican donors continue to be attacked by the Obama re-election campaign, then it's right on the president's doorstep.
- c. It also affects the Latino community (...) and including whites. ***Going beyond that***, there is an institutionalized form of daily repression that takes place against Latinos.

一方、一方向的な移動とは外れる(24)のような表現とは共起しない。共起する場合は主語一致の分詞構文の一部となる。

(24) #***Going around to.../back and forth***

最後に、大別すると移動に分類されるが正確には移動変化とでも言うべき turning も事情は同じである。共起する要素は大きく分けて PATH と GOAL だが、いずれも発話内容に関わる限りは懸垂分詞として使用可能となる。

- (25) a. ***Turning back to*** inside politics right now,
- b. ***Turning to the ethnographic study***, the broad claim in this part of the discussion has been that (...).
- c. ***Turning the comparison round the other way***, another recent study examined the performance of schizophrenics on two standard “creativity”

Going/moving と同様、基本的には一方向的移動を表す要素が多いが、変化も表すために、(25c)に見るような変わり種もある。しかし、やはりいずれにも共通しているのは、後続する発話内容に何らかの形で関わる側面を表すという点である。PATH や MANNER でも、(26)のように内容に無関係であれば懸垂分詞としては容認できない。

---

<sup>1</sup> このことは、英語という言語の特質から説明づけることができる。英語は衛星枠付け言語 (Satellite-Framed language) であり、移動経路は別要素で表すことと並行していると考えられる。

(26) *Turning {#slowly/#slightly/#around the corner}, ...*

以上、個々の事例に関しては細かい点で異なる制約が見られるものの、大枠として「後続する発話内容に関わる要素」が求められることがわかった。特に PATH 表現への制約は厳しく、抽象度の高い一方向的移動が求められた。この理由は、発話の話題では空間的な移動から話題提供順という時間的な移動へと転用されることと関係するためと考えられる。

### 3.4. その他の事例

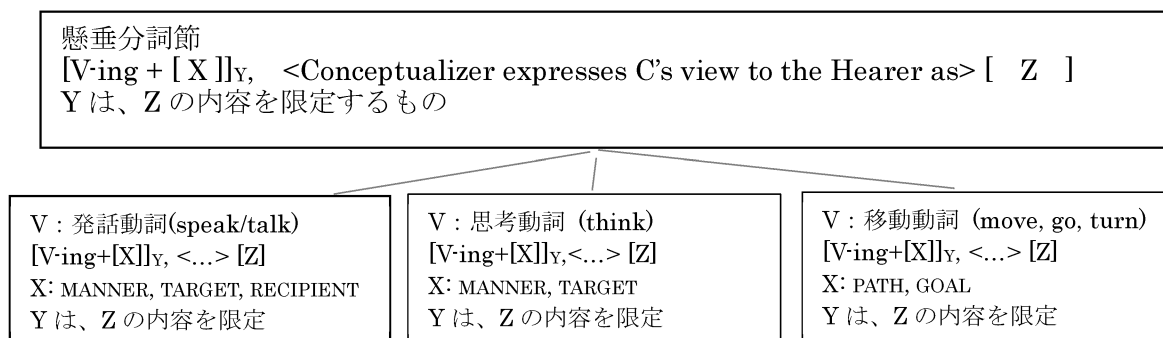
これ以外にも懸垂分詞がメタコメント表現として定着しているものがある。以下に挙げるのは特に論文形式などで多用される事例である。

- (27) a. Frank, we have about a minute. *Summing up*, the ball is in whose court?  
b. *Summarizing so far*, SSCG faces two problems. First, (...).  
c. *Concluding*, the items in the Greek version of TER form a scale that has reasonable internal consistency/reliability for all subgroups of our sample.  
d. *Examining the two groups to see why they felt the way they did*, there's very little difference. (COCA: Spoken)  
e. *Assuming* there's kernels of truth here, did that happen because of imprisonment? I think this is disastrous.

いずれも議論の進め方に関連する動詞由来の表現である。動詞 (句) そのものに意味情報が豊かであるためか、余計な要素が共起することはなく、共起しても *so far* や(27d)の目的語のように主節内容の前提となる情報に限られる。このことも今まで見てきた事例で一貫した意味傾向を示しており、懸垂分詞を認定する意味的スキーマであることが確認できる。

### 3.5. まとめ

以上、懸垂分詞節が談話的コメント機能を適格に発揮する条件として、主節内容との関わりが求められることが確認された。この構造を暫定的にまとめると以下ようになる。



図示では簡略化して MANNER, TARGET としているが、現実には Z の内容限定に貢献するという条件が付加されるため、もう少し詳細な意味が要求されていることになる。

また構文の意味の中には遂行節に相当する<Conceptualizer expresses C's view to the Hearer (as [Z])>が介在している。この存在によって懸垂分詞節が主節とは異なるレベルで

使用され、独立度合いが高いという特徴をもつ。このことは、(28)のように **if/when** 節の存在を許し、それ自体が従属節として本来対応すべき主節との関係が不明瞭なことからもわかる。

- (28) a. *[Talking of waffling,]* if I could just shift ground slightly to another issue, it's been touched on already, and that is of jargon.
- b. *[Moving on now to another subject,]* if your kids are out this evening, you will want to stay with us for what I promise will be a revealing look inside the world of our teenagers.
- c. *[Summarizing,]* if you go to Japan, try the supermarket meals, you'll save money and it is part of the experience.
- d. *[Thinking back,]* if I don't think step by step, I can't imagine how I changed.

ここからわかることは、懸垂分詞節がもともとの「従属的」な意味から変化して、それ単独でも機能できる独立した談話的意味を獲得しつつあることである。<sup>2</sup>この形式的な変化に加えて、後続の発話内容を限定するという意味範囲の特殊化も伴っている。懸垂分詞節に新しい形式と意味とがペアになった、構文化 (Traugott and Trousdale 2013) 例とみなせる。

#### 4. 結語

本論では、懸垂分詞構文として認可され使用が認められるようになる条件について、言語面から検討した。懸垂分詞構文は周辺的ではあるが、その存在意義である「概念化者の観点から見た事態描写」という側面を強めた形で、暫定的ではあるが各々の懸垂分詞がメタ的な使用を慣用化させ構文化しつつあることを見た。

まだ網羅的に検討したわけではないため、このスキーマがどの程度幅広くあてはまるのか、どのように定着が進んでいるのかについては今後の課題としたい。

#### 参考文献

- Evans, Nicholas 2007. "Insubordination and its uses," *Finiteness: Theoretical and Empirical Foundations*, Irina Nicholaeva (ed.) Oxford, Oxford University Press, 366-431.
- Goldberg, Adele. 1995. *Constructions: a construction grammar approach to argument structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- Goldberg, Adele. 2006. *Constructions at work: the nature of generalization in language*. Oxford: Oxford University Press.
- 早瀬尚子 2009. 「懸垂分詞構文を動機づける「内」の視点」坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明 (共編) 『「内」と「外」の言語学』開拓社, 55-98.
- Hayase, Naoko 2011. "The cognitive motivation for the use of dangling participles in English" In *Motivation in grammar and the lexicon*, eds. Radden and Panther, Amsterdam/Philadelphia: Benjamins, 89-106.
- Traugott, Elizabeth C. and Graeme Trousdale 2013. *Constructionalization and Constructional Change*. Oxford: Oxford University Press.

<sup>2</sup> この変化は、従属節であった懸垂分詞節がそれ単独で意味を持つようになることから、いわば、Subordination から Insubordination (Evans 2007) 的な位置づけへの変化とも考えられる。